

奥秩父前衛	積翠寺から帯那山	No. 100
-------	----------	---------

昭和36年4月5日の奥多摩縦走をスタートに6年8ヶ月、遂に我が山行も百回を数えることになった。百回という数字に拘るわけではなく、ひとつの目的の元に6年8ヶ月ひたすら続けたということの意義、この回の山旅で得た何にも代えがたい何か、これからの自分の生き方、行き方についての分岐点……、そういったあらゆる観点での記念日である。勿論正直に言って、一年ぐらい前からこの百回目の登山を意識して待ちわびもしていた。

この年間に親から何の心配もされずに……とまではいかぬが、何の咎めも受けずに行くようになり、しかも冬の山や岩の山なども手にするようになった。山の動物や植物から平地のそれらまで心が動かされるようになった。苦しさに耐えること、一人で判断すること、集団生活、自然界の動き……、金を払っても買うことができない数々の貴重な高価な物を手に入れることができた。二度とない貴重な青春時代をこれだけのために費やしたことにまったく悔いはないし、むしろ誇りに思っている。これからの自分の人生の中にも充分に活かしていくべき生活の一部として「山」がある。

百回目という切れの良いところで、大いに反省し自己啓発の場を作ることにした。そして、百回の山行を記念して、どこか静かな山でのんびりと景色を楽しみながら旨い物でも食ってみることにした。

我が6年8ヶ月の山旅の中に数多く登場し、我が山旅の良き理解者・協力者で教師でもある恩田を誘ってみた。今までに上った山の中からいくつか選び出し、その中から26回目の山(昭和39年1月26日)帯那山を行き先を選んだ。この日のメンバーは、恩田と彼の婚約者である石川登紀子さん、それに鶴飼、太田、阿部、野中の総勢七名。

昭和42年12月16日

新宿発23時45分長野行最終列車。この列車には何度お世話になったことだろうか。山登りを始めた頃は、この列車は23時50分発だったように憶えている。石関が参加できぬとのことで、甘栗を差し入れに来てくれた。シーズンオフで列車は比較的空いている。たいして眠くもないので甲府で下車するまで鶴飼とずっと雑談。

昭和42年12月17日

甲府3時13分着。景気よくタクシーで入ろうと思ったが、山交の横の路地の屋台でラーメンを食べて腹ごしらえをした後、満月の下を歩くことにした。駅から北へ一直線に武田の城に向かって。

月明を頼りに地図が読み取れる明るさ。一昨日の20年ぶりの大雪がまだ道の脇に残っており、月の光に照らし出されていい感じになっている。灰色の氷に覆われた武田神社の濠を右手にやり、積翠寺に着く頃に月は山の端に隠れて待望の朝を迎えた。

積翠寺は武田信玄誕生の地で、正式には「臨濟宗妙心寺派青松山積翠寺」という。なかなか風格のある立派な寺である。武田神社から積翠寺にかけての道の両側には立派な合掌造りの家が多く、中にいくつか昔の庄屋の家であろうか、かなり大きな家がある。又これらの家々は群落を形成せず、道を挟んで適当な間隔で連なっている。

寺からさらに登っていくと要害城の跡を通過して段々に山らしくなってくる。本城(今の武田神社)より山奥にある要害城ははたしてどのような意図で作られたものなのだろうか。隠し砦か?などなど思い浮かべながら歩き、集落の外れて水を汲み太良ヶ峠への道へ。

峠に上るにつれて視界は開けて、素晴らしい眺めの連続。近くの御坂、富士、大菩薩は勿論のこと南アルプスの鮮やかな連なりも。そしてどの山も大雪の後だけに立派に化粧しているし、足元の甲府盆地の家々の屋根や田畑の雪化粧も負けずに美しい。

峠から少し登った落ち葉でいっぱい雑木林の中で食事。予定どおり鉄鍋を出し焼肉コンパ。

## 踏み跡 < My mountains >



山では食べたことがないような豪華な食べ物で、美味しさは最上級。食事の後はトカゲ組と頂上組に分かれた。

頂上はパラボラの周囲に足首を没するほどの雪があり、それも燦燦と降り注ぐ陽光に時々刻々水と化している。頂上まで来るとまた新たな景観に驚かされる。権現岳を中心としたバカに貫禄のあるハケ岳、その手前に金ケ岳、茅ケ岳、曲ケ岳の偽ハケ岳連山。北アルプスもうっすらと見えるし、北方にはすぐにも行けそうな近さで金峰と国師。一年前にザイルの練習に行



った小檜山も。色々な山がそれぞれの思い出を交えて目に入ってくる。登山の持つ表面的な面白さはこの一点に尽きる。

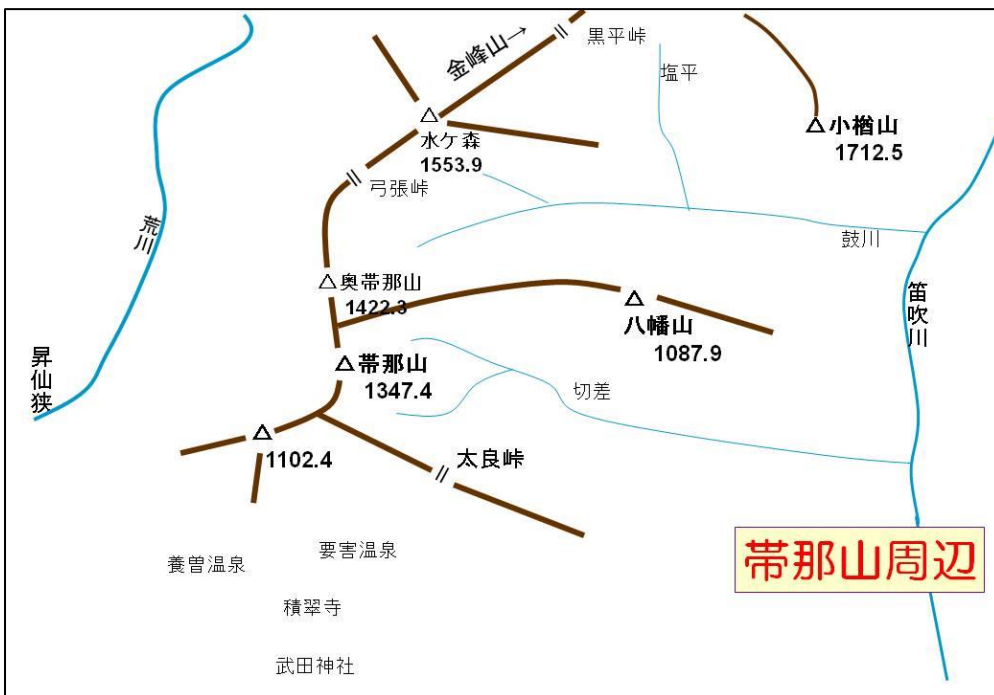
(右写真:富士をバックに)

トカゲ組のいるところに戻っておやつを食べて14時30分に下山開始。下りは南アルプスの山々を数えながら、枯葉を踏み……。積翠寺に16時に到着。往路は歩きだったので、復路は16時40分のバスで甲府駅へ。(40円)

甲府駅17時15分。駅近くの店に入りラーメンで打上げ。「100回目の登山を祝して

恩田がおごってくれた」と手帳にメモが残っていた。17時50分発高尾行に乗り、昭和42年の山歩きはこれにて終了となった。

記念すべき山行にふさわしく思い出の山々が生々しく目によみがえり、当初予定したとおりのリラックスした



山行ができた。何より天候に感謝するしかない、ありがとう!! 百回どころではなく、二百回でも三百回でも、体と心が衰えるまで登り続けなくては……  
体の若さはいつか衰える日が来るかもしれないが、心の若さは失いたくないものだ。

以上

(修正・更新:2023年12月)